

発達障害者支援アセスメントツール研究会 議論のまとめ(平成30年度)

(第1回～第3回議事録、事例検討会参加者アンケートより抜粋・再構成 ただし個別事例に関する質疑を除く)

1 MSPA評価の方法

【主な検討課題】

- ・ ライフステージごとの評価実施方法（いつ、どこで、誰が、どのように行うか）
- ・ MSPA評価への「つなぎ方」（対象者の抽出、受診勧奨の方法）

（いつ、どこで、誰が行うか）

- ・ MSPAの講習の中で、実際にMSPAの評価を実施しているところをビデオで見る講義があったが、そこではクリニックや学校現場等が想定されていた。〔有門〕
- ・ MSPAは、中学生や高校生、特に思春期の子どもが、社会に出る前に自らの特性を理解する上で有用であり、精神科の医師や臨床心理士の方々が活用できるのではないかと。〔有門〕
- ・ 療育センターを受診する前にMSPAを用いて特性を把握し、その結果を持って療育センターを受診していただくと助かる。今は診察、評定、説明を全て外来受診時に行っている。〔友納〕
- ・ 学校からの紹介では、スクールカウンセラーや支援の先生方が知的な検査を行い、発達障害の特性を文章で書かれていることがある。そこを文章でなくMSPAにしてほしい。〔友納〕
- ・ 船曳先生の著書では、本市の特別支援教育相談センターに相当する施設で、多職種が面談からアセスメントまでを同時に行う事例が紹介されており、相談機関での実施も考えられる。〔事務局〕
- ・ MSPA活用の目的は診断をつけることではなく、可能性があれば早期に支援をするということなので、そのことを考えると評価を行う場所も自然と決まってくると思う。〔長森〕
- ・ MSPAの評価は専門機関に繋げる前に行い、早期に支援に活かしていくことが重要だと感じる。そのようなシステムを作ることが当研究会の一番の目的である。〔天本〕

【今後の検討課題】

- MSPA評価を行う拠点となる相談支援機関（専門機関に繋がる前に早期支援を開始することを視野に入れて検討）
- 現・MSPA実施医療機関と相談支援機関との役割分担

（どのように行うか）

- ・ MSPAのいいところは、必ず本人と面接するところ。他のツールは、面接する親や教員の主観を基に付けている。〔発表者・医師〕
- ・ MSPAでは、質問紙によるアンケートは参考の一つである。面接で得られる情報を重視した方が良い。アンケートは記入者の主観がかなり入っており、実際に会って見たときにはアンケートの結

果とそぐわないことが多々ある。それを確かめるために面接をする。〔天下谷〕

- ・ MSPAは評定の中で具体的なエピソードを聞き、コミュニケーション、集団適応力、共感性と一つ一つの項目について詳しく聞き取りしていく。また、事前アンケートも取り、幅広く情報を集める。こうした中で、保護者が子どもの特性に気づいていくこともあるように思う。〔天下谷〕
- ・ 面接をする際のポイントは、できるだけ具体的なエピソードを拾うということである。例えばアンケートで何らかの項目がすごく高く書かれていた場合「これはどういう所からそう思われたのですか。」と質問をして、具体的に起こったことを聞くようにする。質問紙に記載した理由を面接で聞き取ることで、客観的なその人の状態像が浮かび上がってくると考えている。〔天下谷〕

【今後の検討課題】

- 本人及び保護者との面接の場、及び面接評価の進め方

（対象者について）

- ・ まだMSPAを使ったケースが少ないが、IQ60や50だとつけにくい。〔友納〕
- ・ IQが高いが故に理解されにくい人を対象に使うと有効なのではないかを感じる。〔有門〕
- ・ 子どもの自閉スペクトラムに関しては、WISCだけでは結果が出にくいと感じている。大人の方のWAISになると知識が低かったり配列や完成が低かったりするの、自閉の傾向が強いなど分かりやすいが、WISCの結果では自閉の程度が分かりにくいと思っている。MSPAを実施するとその辺りの子どもの特性がしっかりと分かるということを理解した。〔傍聴者〕
- ・ 特に知的能力の高い人の場合、WISC、WAISでは検査結果がすごく高く出て、発達障害の特性が見えにくいことがある。しかし、調べてみるとこだわりがすごく強かったり、コミュニケーションが一方的であったりと発達障害の特性があることがある。これはMSPAを行って初めて分かるところがある。〔天下谷〕

【今後の検討課題】

- 対象者の抽出及び評価受診勧奨の方法（知的能力が高く、発達障害の特性が見えにくい当事者に気づき、MSPA評価につなげる方法 等）

(2) 評価結果の活用方法

【主な検討課題】

- ・ 評価結果の伝え方 (いつ、どこで、誰が、誰に対し、どのように行うか)
- ・ 生活上の支援への反映 (評価結果をどのように共有し、生活上の支援に活用するか)
※ 生活上の支援 = 家庭での子育て、保育・教育・就労、自立生活など
- ・ より専門的な支援への「つなぎ方」、他のアセスメントとの併用

(評価結果の伝え方)

- ・ 教育相談の情報を学校に返しているが、どこまで学校生活に活かせるかは疑問。教育相談の1対1の場面での子どもの姿と、学校の集団生活の中では、子どもの見せる姿は違う。〔中禮〕
- ・ PARSでは、母親が子どもの様子に気付いていないと点数が上がらないことがあるが、その点ではMSPAの方がより特性が現れやすい印象がある。このため母親に対し、診断まではいかないが、子どもにこういう特性があるという話がしやすくなる。〔発表者・医師〕
- ・ PARSの場合はコピーができず、アセスメント結果を学校にどう伝えればよいのか困った。受診者全員には手紙は書けない。保護者に口頭で結果を伝えても、学校まで情報が届かない。〔友納〕
- ・ MSPAはチャートをコピーして関係機関に渡せる。何枚でもコピーができるため、広く連携に使える。保護者は診断目的で来られるので、情報の共有を拒否された方はいない。〔友納〕
- ・ レーダーチャートを見るだけではピンとこないところもあったが、評価者から説明を受け、こだわりや不器用なところなど、本人を見ただけでは分からないところが理解できた。〔支援者〕
- ・ MSPAで共有できるのはレーダーチャートのみだが、支援を要する特性に関する情報や、結果を受けて今後どのように支援していくかという支援の方向性など、点数では分からない情報を特記事項に記述してもよい。またレーダーチャートとは別に所見を作って患者さんに渡し、共有するという方法も考えられる。〔評価者・天下谷〕

【今後の検討課題】

- レーダーチャートの活用方法 (支援の場で活用するために、どのような情報を添えるとよいか)。
- 評価者から支援者への個別説明の必要性、説明方法等

(本人、保護者との共有)

- ・ 面接の際には、まず同席で良いかどうかを本人に尋ねている。だが、本人が思春期である場合や親子関係がこじれている場合は、あえて分けて面接するようにもしている。この場合、親子間で認識の食い違いが生じ、評価結果に納得を得るのに時間がかかることがある。〔天下谷〕
- ・ 親子一緒に面接した場合は、面接の中で親子の間で共通の理解が生まれることがある。また、保護者が面接中にこれまで気づかなかった子どもの困り感に気づくということもある。同席は同席でメリットがある。〔天下谷〕
- ・ 成人の場合、MSPAを用いて情報をまとめる作業の中で、患者の特性を理解し整理することが

でき、支援に向かいやすくなったと感じている。また、結果を聞いた患者も自己理解や今後の展望が見えてくることもあり、医師と患者の共通言語となっている。〔実施機関・医師〕

【今後の検討課題】

○ 本人及び保護者との面接の場、及び面接評価の進め方。【再掲】

（生活上の支援への反映）

- ・ 医師は診断のため、生活に携わる職種の方は支援のためと、職種によってアセスメントに求めるものは異なる。〔長森〕
- ・ MSPAは学校の先生に事前アンケートを書いていただけることが利点。家族のアンケートと学校のアンケートを比較することで、家と学校での違いが分かり参考になる。〔友納〕
- ・ MSPAを発達障害に関わるたくさんの方々に理解していただいて、本市では、発達障害の方への支援にはMSPAを使うという流れにしていかなければいけない。〔長森〕
- ・ 広く広報するだけでなく、ツールの利点と欠点というのをきちんと把握したうえで、間違った方向に行かないようにしなければいけない。〔長森〕
- ・ （事例検討のケースでは）MSPAを取らなかったら、客観的に見えやすい不注意や衝動性に目が行き、薬物療法へ過大な期待をしてしまう。MSPAを取ることで、この子にとっての一番の困難は、むしろこだわりの部分だと分かり、周りがこの子のこだわりを理解し受け入れるというところに支援が広がっていく。〔有門〕
- ・ 実際のフィードバックの内容をもっと聞きたい。また、（評価結果を受けた）実際の支援・療育について知りたい。〔傍聴者〕
- ・ 今後は、うつ病などで休職されている方の復帰支援にMSPAを活用したい。うつ病の患者の中には、発達障害の要素が感じられる方もいる。MSPAを通して、自己理解や環境調整などの支援に生かしていきたい。ただし、職場との連携において、MSPAというツールは知られていないのでこれから共通言語として広げていくための工夫が必要である。〔実施機関・医師〕

【今後の検討課題】

- レーダーチャートの活用方法【再掲】（支援者はレーダーチャートをどう理解すればよいか、評価結果をどのように支援に反映するか 等）
- MSPAの普及啓発（支援者向け講演会、事例検討会など）
- 本市の発達障害児者支援における、MSPA評価及び評価結果活用のガイドライン

（他のアセスメントとの併用）

- ・ 生活場面での支援においては、（何が、どこまでできているか、といった）現在の適応状況も評価する必要があるので、MSPAと他のツールの併用も考えていかなければならない。〔発表者・医師〕
- ・ MSPAの実施にあたり、心理検査による知的レベルの把握は必須。〔発表者・医師〕
- ・ 学習の評定に関して、MSPAでは知的な部分では説明ができないLDの特性を評価する。学習

面を正確に評価し、支援につなぐためには発達検査・知能検査を併せて行うことが望ましい。ただし発達検査・知能検査を必須にすると、検査の待機が生じてしまう。〔天下谷〕

- ・ MSPA評価の際に、学習の欄を空欄にして暫定評価とするなどの対応も必要。〔天下谷〕
- ・ MSPAは診断前に早く支援するためのツールであると認識している。理想的には知能検査も併用した方が良いのだろうが、併用できなくてもまずMSPAを利用することが大切。〔天本〕

【今後の検討課題】

- 知能検査・発達検査の実施方法（WISC・WAIS）
- 適応行動（生活能力）に関するアセスメントの実施方法（例・Vineland-II）
- 各アセスメント結果の統合・総合評価の方法、支援への活用について

(3) 評価・支援体制の構築

【主な検討課題】

- ・ 評価者の確保・育成、関係機関との役割分担（既存の相談・支援システムとの整合）
- ・ 支援の内容と質の向上（評価結果を踏まえた支援のスキルアップ、成果の普及啓発）
- ・ 評価結果の情報管理・共有（評価結果の管理、ライフステージごとの情報のつなぎ方）

(評価者の確保・育成)

- ・ MSPAの判定を行うには定められた研修を受講し、評価のための技術が必要となる。心理士、医師、特別支援学校の教員など、発達障害の知識を持つ人が評定者である場合が多い。〔有門〕
- ・ MSPAの評価者は医師ではなく、それ以外の支援に関わる人にしないと、将来、上手く活用していくことは難しいのではないかと。〔天本〕
- ・ 少なくとも発達障害に関わる職種、または小児の保育・療育に関わる職種は、評価者として該当すると考えていいのではないかと。〔有門〕
- ・ MSPA講習会は希望者が多く、なかなか受講できない。MSPAの評定ができる人を増やしていくことが困難な状況の中で、活用に繋げていくことは難しいと思う。〔長森・シャルマ〕
- ・ MSPAの研修を受けた方が市内に15名というのは、予想よりも多かった。今後も増えるのではないかと。ただ、有資格者がまだMSPAを活用できているとは言えないと感じる。〔天本〕
- ・ 現在の評価者は医療機関等に所属し、自由に動ける立場ではない。MSPAを診断の手前での早期支援に活用するのであれば、そうした支援の場に評価者がいないと、有効に活用できないのではないかと。〔長森〕
- ・ 今後の研究により、MSPAが有用であるということが見えてくれば、次の課題として、どの場所に、どのくらいの数の評価者が必要か、また評価者と繋がる支援者がどの職種の方たちであるかといった、支援体制の構築についての議論が必要であると考えている。〔事務局〕

【今後の検討課題】

- ◎ MSPAの有効性、活用方法の検討（支援の基本ツールとしての活用可能性の検討・検証）
- MSPA評価者の確保・育成（拠点となる相談機関における評価者の確保、民間医療機関等との協働による市内の評価者育成）

(評価者のスキルアップ)

- ・ 評定者である心理士等に、発達障害（特に自閉スペクトラム症）の知識が必要〔発表者・医師〕
- ・ 講習を受講した評価者の方々のスキルアップの場や、学びの機会が必要と思う。〔事務局〕
- ・ MSPAを取っていて、これで大丈夫なのだろうかと自分も心配になる。他の評価者と非公開の場で症例を出し合い、評定の質を高めるための勉強会があれば参加したい。〔友納〕
- ・ 評価者が面接するスキルを身に付けていくことが重要と感じた。〔支援者〕
- ・ 評定の中で、保護者の気付きを引き出すスキルを評価者の方には磨いていただきたい。加えて、

ただ検査をするというスタンスではなく、検査をすること自体が支援であるということを知っていただきたい。〔発表者・医師〕

【今後の検討課題】

- MSPAの普及啓発【再掲】
- MSPA評価者のスキルアップ研修（評定に関する事例検討）

（関係機関との役割分担）

- ・ 専門性と使いやすさのどちらを優先すべきかを考えたとき、共通言語であることの方が、本人たちの支援を考える上で優先度が高いと思う。〔シャルマ〕
- ・ 他の機関との連携のため、アセスメントツールは誰でも分かるものにする必要がある。〔天本〕
- ・ MSPAはレーダーチャートを見ることで、一目で発達特性が理解できる。また、評定を行う中で、「どの程度困っているか」という困りの程度を見取ることができる。〔友納〕
- ・ MSPAで全てが分かる訳ではない。MSPAは支援開始の入口であって、それぞれの専門職が必要なツールを重ねて使った上で、総合的に支援のプログラムを組み立てていくべき。〔有門〕
- ・ MSPAは（生得的な）基本特性を評価するツールで、現在の状態（生活場面での適応状況）を示すものではないことを理解しておく必要がある。〔発表者・医師〕
- ・ 精神科では大人の発達障害に非常に困っている。行政主導でMSPAを利用して、支援や就労の体制を整えてほしい。〔傍聴者〕

【今後の検討課題】

- レーダーチャートの活用方法【再掲】
- MSPAの普及啓発【再掲】
- 本市の発達障害児者支援における、MSPA評価及び評価結果活用のガイドライン【再掲】
- MSPA評価を行う拠点となる相談支援機関【再掲】

（支援の内容と質の向上）

- ・ 発達障害のある人は、いずれかの段階でアセスメントを受けているはずだが、それが後の支援に活かされていない状況なのではないか。〔長森〕
- ・ 総合療育センターは発達障害への対応で非常に多忙な状況となっており、人事面も含めて、地域ニーズへの対応が非常に遅れている。〔長森〕
- ・ （特性チャートを受け取り、活用する立場の）支援者も発達障害に対する知識をしっかりと持っていないと、この評価結果を支援に活かさないのではないか。〔発表者・医師〕
- ・ 基本的にASDのこだわりは減らないという前提で話をしていかなければならない。こだわりを上手に使うなり、こだわりに対する理解がベースにあって支援をすることで、こだわりによる困り感が減ると考えている。〔発表者・医師〕
- ・ 評定者・支援者の双方が、定期的にMSPAや発達障害の講習を受ける場が必要。〔発表者・医師〕

- ・ 事例検討会は大切だと感じている。事例を見て初めて「こうやって使うのか」というイメージを掴めるのではないか。〔天本〕
- ・ アセスメントツールやその評定方法だけでなく、より「支援」に視点を向けた事例検討を行って欲しい。〔傍聴者〕
- ・ 支援はされているが、それが本当に本人の役に立っているのかと感ずることがある。発達障害を理解し、知識を深め、一人ひとり異なる本人の特性を大切に、無理のない範囲で成長していけるような支援を行ってほしい。〔傍聴者〕

【今後の検討課題】

- レーダーチャートの活用方法【再掲】
- MSPAの普及啓発【再掲】
- 本市の発達障害児者支援における、MSPA評価及び評価結果活用のガイドライン【再掲】
- MSPA評価を行う拠点となる相談支援機関【再掲】
- 自閉スペクトラム症をはじめ、発達障害について学ぶ機会の充実（MSPA評価者となる人、支援者、当事者・家族のそれぞれに向けた研修等の充実）

（評価結果の情報管理・共有）

- ・ 特性チャートが独り歩きしてしまう恐れがあることから、評定者の責任は非常に大きいということを理解しておく必要がある。〔発表者・医師〕
- ・ MSPAの利点は共有しやすさと聞いているが、実際の支援にはより具体的な情報のつながりが必要。そうした情報もあわせて伝えられる仕組みがあるとよい。〔傍聴者〕
- ・ 支援者として子どもの特性を知ることが大切なことだと思う。ただ、それをどう支援に生かせばよいか、また支援者をどうつないでいけばよいか、そのコーディネーター役が必要。〔傍聴者〕

【今後の検討課題】

- レーダーチャートの活用方法【再掲】
- MSPAの普及啓発【再掲】
- 本市の発達障害児者支援における、MSPA評価及び評価結果活用のガイドライン【再掲】
- MSPA評価を行う拠点となる相談支援機関【再掲】

発達障害児者のライフステージを通じた支援のイメージ・試案（MSPA活用）

